

きょういく・さど



令和6年12月12日
佐渡市教育委員会
学校教育課

GIGAスクール構想とこれからの教育



学校教育課長 渡邊 一哉

GIGAスクール構想の進展により、教育現場は大きく変化しています。児童生徒への一人一台端末の配備やデジタル教材の活用は、学習の効率化に大きく貢献しています。しかし、デジタルツールだけでは、子どもたちの心を育むことはできません。教職員の皆様の温かい言葉や一人一人の生徒に向き合う姿勢が、子どもたちの成長を支える上で最も大切です。佐渡市教育委員会では、ICT環境の整備を進めるとともに、教職員のICT活用スキル向上のための研修を充実させ、事務の効率化を図り、その時間を子どもたちへのきめ細やかな指導に充てて欲しいと考えています。

昨年度から開始の「地域未来塾」は、オンラインで大学生が中学生の学習をサポートする取組です。この取組は、生徒たちの学力向上だけでなく、多世代コミュニケーション能力の育成にもつながっており、GIGAスクール構想が目指す一人一人の学びを最大限に引き出す教育の実現に向けた新たな一歩と言えるでしょう。

デジタル化が進む現代において、技術の重要性は高まっていますが、人間が持つ創造性や共感力といった「人間力」も重要です。AIなどのデジタルツールは、私たちの生活を便利にします。しかし、それを使うのは人間です。子どもたちには、デジタルツールを使いこなす能力だけでなく、論理的思考力、問題解決能力、コミュニケーション能力など、自ら考え行動できる力を育む教育が不可欠です。

デジタル化と人間力は、車の両輪のようなものです。どちらか一方が欠けても前に進めません。デジタルツールを効果的に活用し、同時に人間力を高めることで、子どもたちの未来を明るく照らす教育を創出していきましょう。

僕だけじゃないと 思えるかな

～例外探し、成功の責任追及、コンプリメント～

管理主事 本間 智英

2学期も残りわずかとなりました。2学期は行事などがたくさんあり、一人一人の子どもの活躍が様々な場面で見られたことと思います。ありがとうございました。

さて、私が学級担任の頃、この時期は、何かに追われている記憶しかありません。できていないことが多く、自分一人が焦っていました。このようなときは、必ず（私だけ？）、子どもの問題が増え、注意ばかりしていました。当時の私は、子どもの不適切な言動ばかりに注目し、子どもの適切な言動は目に入らない。子どもとの関係は悪くなる。そして、自信はなくなり、自分だけがうまくいっていない気がしていました。

今の私なら当時の私に、「ずっと不適切な言動をとっている？」「不適切な言動をとっていないときはない？」（例外探し）「なぜ、適切な言動がとれたか、子どもに聞いてみた？」（成功の責任追及）「例外の言動を褒めたり、認めたりした？」（コンプリメント）といった言葉をかけようと思います。このような言葉をかけたところで、当時の私も子どもも変化は見られないかもしれません。でも、私の気持ちの持ちようや、子どもへのかかわり方は少し楽になるかなあ、と思っています。

そして、「今悩めることは、自分だけじゃないよ。きっと周りの人も同じ悩み、経験してきた悩みだよ。誰かに話してみてもいいかもね。」と付け加えます。

昔話にお付き合いいただき、ありがとうございました。教職員の笑顔があふれる学校に！

【参考】

明日から使える教育相談・生徒指導サイト PSYCLA サイクラ
<https://www.psycla.com/> (12月2日閲覧)
森俊夫・黒沢幸子著(2002)『＜森・黒沢のワークショップで学ぼう＞解決志向ブリーフセラピー』ほんの森出版

人権教育、同和教育の授業づくり



教育指導主事 水谷 武

10月、佐渡総合教育センター主催の人権教育、同和教育研修講座では、関係団体からの協力を得ながら、佐和田地区における被差別部落の歴史を知り、実際に現地を歩いて学びを深めることができました。

夏に行われた部落解放同盟新潟県連合会主催のフィールドワークでは、同地区に加え相川地区の被差別部落にも出向き充実した現地学習となりました。また、当時両地区には、被差別部落出身の子どもたちの学びを支える興仁学舎と明治学校という教育施設が存在していたことを知りました。

今も地域に明治学校跡が残る相川中学校区では、小中学校合同の研修会として、上記の現地学習の経験を踏まえ、明治学校の創設者で後の相川町長となった森 知幾(ちき)を紹介し、知幾の功績を伝える自作の読み物教材「森知幾と明治学校」を作成しました。そして、グループワークをとおして効果的な授業の導入や指導案を検討するなどして授業づくりに励みました。

今年度の研修に携わる中で、人権教育、同和教育の授業づくりで大切にしたい視点を次のように考えました。

- ・実際に地域に出て実感する
- ・小中合同など複数で話し合う
- ・身近な地域資源を活用する
- ・関係機関等と積極的に連携する

自信をもって子どもたちに語ることができる教師の姿を期待しています。

情報活用能力の育成に向けて

指導主事 源田 洋平

今日、人工知能やビッグデータ、IoTなどの先端技術が急速に発展し、社会のあり方が劇的に変わるSociety 5.0の時代に突入しています。このような時代において、子どもたちは、学習の基盤となる資質・能力として、言語能力や問題発見・解決能力に加えて、情報モラルを含めた情報活用能力を確実に身に付ける必要があります。

「教育の情報化に関する手引」(文部科学省)では、情報活用能力を「世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力」と定義しています。この力を身に付けるために、学校教育において一人一台端末を含めたICT機器等を適切に活用しながら、「情報を得る・調べる」「情報を整理・比較する」「得られた情報を分かりやすくまとめる・発信する」等を行っていく必要があります。自転車に乗れるようになるために実際に自転車に乗る練習が必要であると同様、情報活用能力を身につけるためには、端末等を実際に活用して思考・判断・表現する練習を授業等の中で積むことが重要です。

『ミライシードファンサイト』や指導主事発行だよりでは、端末活用の具体的な事例を紹介していますので、ぜひご覧ください。今後とも、授業や家庭での積極的な端末活用をお願いします。



幼保小の架け橋プログラムとは？

義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤を作る重要な時期です。この時期の切れ目のない学びを実現するために、幼保小が連携して取り組むものとして令和4年度に示されたのが「幼保小の架け橋プログラム」です。

具体的には大きく分けて3つの取組があります。佐渡市も今年度より進めています。

- ①小学校区を単位とした連携体制づくり
- ②5歳児と小学校1年生の2年間の「架け橋期のカリキュラム」を幼保小で検討・開発
- ③「架け橋期のカリキュラム」に沿って、幼保小の相互参観や交流活動を実施

幼児教育施設・小学校の教育についての相互理解が一層求められています。

